

中国語の味を表す場面における「話者に意識されない男女差」 —母語話者を対象としたアンケートに基づく事前調査—

武藤 彩加

A Study on “Unconscious Gender Difference” Expressed during Food Tasting in Chinese : A Preliminary Study Based on a Survey of Chinese Native Speakers

Ayaka MUTO

Previous studies have only pointed out two kinds of gender difference in Japanese. One of them is gender difference defined by researchers relating to vocabulary or grammar. The other is gender indicated consciously recognized by Japanese native speakers, that is, consciousness of usages by language users. There has not been much research on language phenomena involving unconscious beliefs of the speakers themselves. Therefore, in this study, I explore gender difference of which speakers themselves unaware aware. I call this language phenomenon “unconscious gender difference” and consider its usage. In order to capture the gender difference appearing in actual use, this survey focused on Chinese used by native Chinese speakers to describe the taste of food. Based on the results of this survey, I examined whether unconscious gender difference manifests itself in speakers’ words during food tasting.

- I. はじめに
- II. 先行研究
- III. 本稿の課題

- IV. 考察
- V. 結論

I. はじめに

従来の研究において、「日本語における男女差」が取り上げられる際には、おもに研究者により指摘される男女差のみが考察の対象とされてきた。すなわち語彙や文法項目等、あるいは日本語母語話者により意識される男女差といった言語使用者の使用意識である。

本稿では、中国語母語話者を対象としたアンケート調査の結果に基づき、中国語話者が味を表す場面で使用する表現に、話者自身に意識されていないと思われる男女差が現れるのかどうかという点について考察する。この考察は、後に続く本調査のための予備調査である。

II. 先行研究

1. 日本語

これまでの研究で日本語における男女差は、はっきりそれと認識できる項目がさまざまに指摘されて

きた（国研 1951、上野 1972、田中 1973、杉本 1975、寿岳 1979、Makino & Tsutsui 1986、堀井 1990、益岡・田窪 1992 など）。例えば従来の先行研究で、女性らしい表現として挙げられているのは次のような項目である。

- a. 終助詞(文末表現)
- b. 呼称(1人称,2人称,3人称)
- c. 音変化(促音化・長音化・音便化)
- d. イントネーション
- e. 語彙(副詞、「お」、～じゃん、奴、食う等)
- f. 文法(主語の欠如、格助詞の欠如、体言止め)
- g. 敬語(ていねいさ)
- h. パラ言語
- i. 聞き手の性別(社会的地位)
- j. その他(呼びかけ、言いよどみ、繰り返しの表現)

このような日本語の男女差は、日本語を学ぶ日本語非母語話者が使用する日本語の教材においても現れ

るとされ(水本ほか(2009)、トムソン木下千尋(2009)など)、日本語の特徴の一つであるともいわれる。

一方で、日本語においては言語使用の中性化が進んでいるという指摘もある。このうち例えばメイナード(2001:31)では、「話し言葉の性差による束縛が緩み、若い男女のことばの性差が縮まっている」といった主張がみられる。そして従来、言葉の男女差とされてきた表現は、昨今、小説や映画、テレビドラマ等に登場する、いわゆる女性(男性)キャラが使用する「役割語」に位置づけられてきており、金水(2003:172)は次のように述べている。

「～てよ」「～こと」等の、特徴的な女性専用表現は<標準語>の位置から滑り落ち、役割語度の強い表現となってしまった。他の女性専用表現も、若い人々を中心に、次第に用いられなくなってきたと言われる。(金水 2003:172)

次に挙げるのは、こうした「役割語」のひとつである「おネエことば」の一例である。

(1)そう、アタシたちへの注目って消費の一環なのよ。でもそれで結構。だって消費されなければ、アタシみたいな存在は食べていけないもの。(『AERRA』2009/8/31号、朝日新聞出版、p.55.)

こうしたおネエことばは、「男性性、女性性の持つステレオタイプの特徴をことばの中に巧みに生かす言語行為である」(阿部 2014)とされ、ことさらに女性専用表現が多用される「仮面としての役割語を駆使している一例」(金水 2003:173)と位置づけられる。

一方、小川(2001)では、大学生がことばの男女差を実際どのように意識しているのかを調査しており、たとえば「日本語の話し言葉には男女の違いがあると思うか」という質問に対し、あると回答したものが57.2%であり、また、「日本語の話し言葉に男女の違いがあるとするとうるどういう場面・表現・言葉遣いなどにあらわれていると思うか」という質問には、「言語上の特徴」であるとする回答が最も多かった(61.8%)としている。このように、日本語における男女差は、終助詞や呼称などの言語上の特徴が、研究者だけではなく日本語母語話者によっても意識されていることがわかる。

2. 中国語

中国語の性差に関する研究は、陳原(1980)や、陳松岑(1985)などから始まるとされ(河崎 2011)、その後、現代中国語の漢字とその意味に関する研究

(任 2008 ほか)、呼称に関する研究(前山 2004、曹 2008 ほか)、語彙に関する研究(林 2006 ほか)などの研究がある。このうち例えば任(2008)では、「女偏の漢字」、「男女」という語順、「中国人男性と女性の名前の漢字使用」などの面から考察を行ない、現代中国語の漢字使用には固有のジェンダー意識が存在していることを主張した。またこれを受け、任(2015)は、第三人称“他”(彼)と“她”(彼女)についての辞書の用例文を考察し、現代中国語における性差別を指摘している。

一方、現代中国語の言語使用実態に関する研究として、河崎(2011)では、「現代中国語は日本語のように人称詞や終助詞など誰にでもよく見える形でその差が存在していない」としつつも、中国の若い女性の言葉について分析した結果について、次のように述べている。

だが、先行研究および今回の調査等により、音韻、語彙、表現、口癖においてもやはり男女、年齢の差はあることは分かった。ことに口癖調査からみると、若い女性(高学歴)女性は、「暈、郁闷」などの流行語系のぼやきをし、「滾」や「去死」など「あっちへ行って」という甘えにも取れる罵り程度の低い罵りことばを使い、英語の使用、驚愕・感嘆の多用などに特徴があると言える。(河崎 2011:10)

ただ、この論文でも指摘されているように、日本語と比べて中国語は一般的に性別や年齢による差は少ないとされるからか、研究が十分ではなく、楊春(2010)などにおいても、その点について中国語独自の視点から実証的に研究されたものは少ないということが指摘されている。よって管見の限り、この河崎(2011)においてはじめて、現代の中国語母語話者が普段使用している中国語を観察し考察した、中国語における男女差に関する研究が始まったといえる。

Ⅲ. 本稿の課題

以上でみた男女差に関する先行研究は、日本語においては終助詞(文末表現)や語彙(奴、食う等)、敬語(ていねいさ)など、比較的目に見える形の言語現象がおもに取り上げられてきた。一方、中国語においては、先にみたようにジェンダー意識やフェミニズム、性差別という観点からの研究がおもなも

のであり、中国語母語話者が普段使用している表現に関する研究は十分ではなく、前章で見たように河崎（2011）ではじめて、その点について考察がみられる。同論文においては、高学歴の若い女性の口癖について「英語の使用、驚愕・感嘆の多用などに特徴がある」などといった指摘があるが、本稿はこの河崎氏の研究と同様に、現代中国語の言語使用の実態に注目する。

中国語の話しことばの性差の研究は十分でないため、日頃、華中科技大学の学生のチャットやおしゃべりを観察するうちに、男女で使う、口癖のようなものが違うことに気がついた。

（河崎 2011：4）

この指摘を受け、本稿では、現代の中国語母語話者が使用する表現について、味を表す場面に注目し、そこに男女差があるかどうかを観察する。具体的には、男性回答者と女性回答者に味についての表現を書きだしてもらい、その回答に違いがあるかどうかをみることによって、男女差が無意識に影響している可能性のある表現を探す、という方法を試みる。方言に関する研究においては、こうした話者自身に

も意識されない「気づかれにくい方言」に関する論考がいくつみられるが（沖 1999、山田 2001 ほか）、男女差についても方言と同様、話者自身に意識されない差が現れるのかどうか。本稿における調査はこうした研究課題について検証するための、本調査前の事前調査に位置づけられる。

IV. 考察

1. 中国語母語話者を対象とした調査の概要

以上の課題について検証すべく、中国語母語話者を対象に調査を実施した。調査時期は 2015 年 9 月、調査地は上海市、北京市、重慶市における 3 つの大学、対象人数は男性 34 名、女性 42 名の計 76 名である。調査方法は自由記述式で、204 種類の食品のリストの中の、各々の食品について「その味を表現するのに中国語ではどのような表現があり得るのか」を自由に書くよう依頼した。この調査で使用した調査紙は次のようなものであった。

資料 1：使用した調査票の一部

全世界的的语言中有关「表现味觉的词汇」的问卷调查

我们正在做一项有关各国语言如何表达味觉的调查。
期待您的配合。

※以下食品或食材,好吃或者不好吃的时候,用什么词汇可以形容呢,请您写下您认为合适的词汇。

		好吃时的词汇表达(积极词汇)			不好吃时的词汇表达(消极词汇)		
		1	2	其他(可以写下多个)	1	其他(可以写下多个)	
	法棍	脆脆的	粘粘的	松软的、金黄色、香喷喷	干巴巴	硬硬的	
		好吃时的词汇表达(积极词汇)			不好吃时的词汇表达(消极词汇)		
日语		1	2	其他(可以写下多个)	1	其他(可以写下多个)	
no. 1	冰棍						
no. 2	雪糕						
no. 3	炸面						
no. 4	油炸食品(全体)						
no. 5	蛤蚧						
no. 6	带有脂肪的鱼(金枪鱼腹部肉)						
no. 7	墨鱼						
no. 8	石锅拌饭						
no. 9	草莓						
no. 10	农村料理						
no. 11	乌龙茶						

資料2：使用した調査票の一部（日本語訳）

世界の言語の「味の表現」にかんするアンケート

私たちは、様々な言語でどのように「味」を表現するかについて調査しています。
ご協力のほど、よろしく願い申し上げます。

※つぎの食品・食材の「おいしさ」や「まずさ」を表す場合、どんなことばがふさわしいか考えてください。

no. ex.	言語	「おいしさ」を表すことば(プラス評価)			「まずさ」を表すことば(マイナス評価)		
		1	2	その他(いくつ書いてもかまいません)	1	その他(いくつ書いてもかまいません)	
	フランスパン	バリバリ	モチモチ	ふんわり、きつね色、こうばしい	バサバサ	かたい	
				「おいしさ」を表すことば(+評価)		「まずさ」を表すことば(-評価)	
	日本語	1	2	その他(いくつ書いてもかまいません)	1	その他(いくつ書いてもかまいません)	
no. 1	アイスクャンディ						
no. 2	アイスクリーム						
no. 3	揚げそば						
no. 4	揚げ物(全般)						
no. 5	あさり						
no. 6	脂のった魚(マグロトロ)						
no. 7	イカ						
no. 8	石焼ピピンバ						
no. 9	いちご						
no. 10	田舎料理						
no. 11	ウーロン茶						
no. 12	ウエハース						

回答時間は90分程度であった。回答者は主に日本語を専攻する大学生であったが、質問票はすべて中国語で書かれており、回答も中国語によるものであったため、被験者の専門が結果に影響することは少ないと思われる。食品リストに載せた食品の選定の方法については、大橋他編(2010)で挙げられている約200種の日本語の味表現すべてに対応する形で食品を挙げて、多種多様な味や食感等が網羅されるよう配慮した。例えば「サクサク」「バリバリ」といった大橋(2010)で挙げられている表現に対しては、「パイ」「ポテトチップス」というような食品をこのリストに挙げた。このように作成したリストをもとに、一人の回答者につき68食品について、それぞれの食品をみて、「直感的にどのような表現が想起(イメージ)されるか」を中国語で自由に回答するよう依頼した。

くり返すが、この調査は事前調査として実施したものである。この後に続く本調査の実施に当たっては、質問票やサンプル数、そして分析手法の妥当性等について、理論的な検討が必要となると考えている。

2. データの分析

以上のような手順で調査を実施し、1,423種類の中国語の味表現を得た(延べ語数は11,108)。以下の分析はすべて中国語を母語とする研究協力者2名

の翻訳に基づくものであり、筆者の分析結果に対しても研究協力者に確認を依頼する、という方法で進めていった。研究協力者に関する情報は以下のとおりである。

- ・研究協力者A：女性、26歳、日本語能力N1、日本語学専門(博士課程在籍)
- ・研究協力者B：女性、26歳、日本語能力N1、日本語学専門(修士課程在籍)

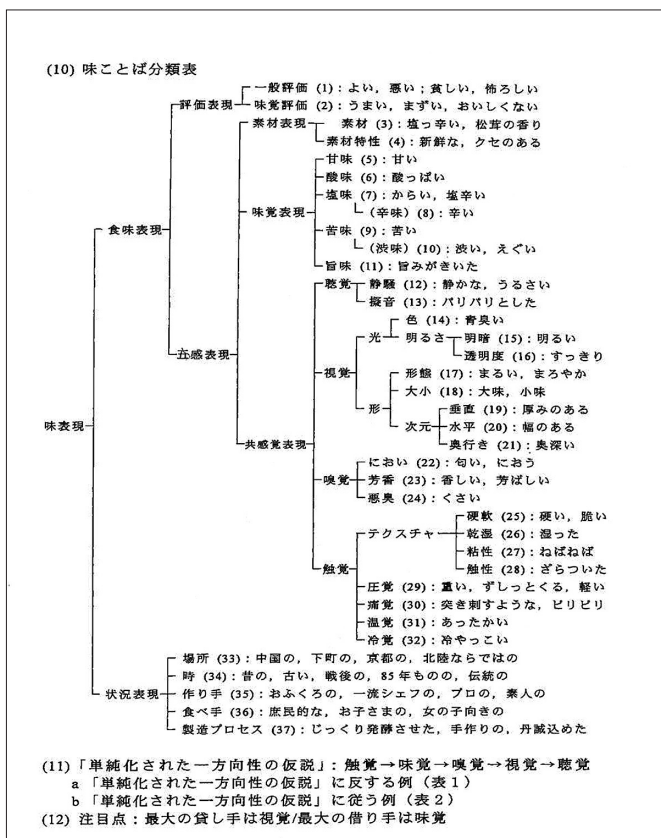
この調査で回答された「おいしさ」および「まずさ」の表現の男女別の数は、以下の通りであった。

表1：本調査で得たおいしさ、およびまずさの表現の語数

		男性	女性
おいしさ表現	(異なり語数)	467	474
	(延べ語数)	3,283	4,220
まずさ表現	(異なり語数)	231	251
	(延べ語数)	1,540	2,065
	計	5,521	7,010

次いでこれらのデータを、次に示す表2により分類した。

表2：瀬戸（2003）による「味ことば分類表」



(瀬戸 2003:29)

以下では、この分類表により整理されたデータをもとに考察する。

3. 「おいしさ表現」：男性に使用された表現 まず、男性による回答をみていこう。

表3：男性に多く使用されたおいしさ表現（回答数、上位10表現）

No.	カテゴリ	中国語	日本語	回答数
1	芳香	香	いい匂い	167
1	甘味	甜	甘い	167
2	甘味	甜甜的	甘みがある	105
3	甘味	香甜	甘くて美味しい	98
4	硬軟	有嚼劲	歯ごたえがある	88
5	味覚評価	美味	美味	77
6	乾湿	脆脆的	さくさく	61
7	味覚評価	可口	口に合う	60
8	乾湿	脆	さくさくの歯ざわり	58
9	一般評価	爽口	爽やかな味	50
10	素材特性	新鲜	新鮮な食感	50

この表3が示すように、中国語を母語とする男性は、「香」（いい匂い）と「甜」（甘い）という表現で最も多くおいしさを表した（ともに167回）。以下、「甜甜的」（甘みがある）、「香甜」（甘くて美味しい）など、「甘味」でおいしさを表す例が続く。また、「硬軟」の表現や（表3の「有嚼劲」（歯ごたえがある））、「味覚評価」の表現（表3の「美味」（美味）、「可口」（口に合う））も多く使用された。「味覚評価」の表現とは、日本語では次のような表現をいう。

(2)「味覚評価」の味表現：味そのものを評価する表現：美味しい、味わいのある、うまい、デリシャスな、味わいのある、まずい、うまくない（瀬戸 2003：41 より要約）

またこの調査では、「鮮美」（旨みがある）、「好吃」「好喝」（おいしい）などの「味覚表現」表現も男性により多く使用された。

4. 「おいしさ表現」：女性に使用された表現

一方、次に挙げるのは、女性に多く使用された表現である。

表4：女性に多く使用されたおいしさ表現（回答数、上位10表現）

No	カテゴリ	中国語	日本語	回答数
1	甘味	甜甜的	甘みがある	176
2	甘味	香甜	甘くて美味しい	168
3	乾湿	脆脆的	さくさく	155
4	硬軟	有嚼劲	歯ごたえがある	113
5	芳香	香	いい匂い	112
6	一般評価	爽口	爽やかな味	107
7	味覚評価	可口	口に合う	104
8	芳香	香喷喷	香ばしい	101
9	芳香	香香的	匂いが美味しそう	99
10	素材特性	新鲜	新鮮な食感	95

この表4が示すように、女性もやはり男性と同じく、「甜甜的」（甘みがある）、「香甜」（甘くて美味しい）などの「甘味」の表現、および「香」（いい匂い）などの「芳香」の味表現を多く使用した。ほかに、「有嚼劲」（歯ごたえがある）などの「硬軟」の表現でも多くおいしさを表した。また表4「一般評価」の味表現である、「爽口」（爽やかな味）や、「味覚評価」の「可口」（口に合う）でおいしさを表すケースが多い、という点も男性と同様である。「一般評価」の味表現は、日本語においては次のような表現がある。

(3)「一般評価」の味表現(a)：味ことばに限定されない表現：ぜいたくな、洗練された、すばらしい、よい

(4)「一般評価」の味表現(b)：人の性格などを表す：やさしい、でしゃばらない、控えめな、親しみやすい（瀬戸 2003：39 - 40 より要約）

この調査では、次のような中国語の一般評価の味表現が女性により多く使用された。

(5)中国語の「一般評価」の味表現：「爽口」「清涼」

（さわやかな）、精致（上品な）、清新（すがすがしい）

また「味覚評価」の味表現である「可口」（口に合う）、「美味」、「鮮美」（旨みがある）、「味道棒」（美味しい）、「美味十足」（とても美味しい）なども、多く女性に使用された表現である。

5. 「おいしさ」表現に関する男女の比較

以上、男女によく使用された上位10表現においては、男女の差はあまり大きくみられなかった。次に以下では、回答された表現の全体をみていく。以下に示す図は、男女それぞれが「おいしさ」を表す際に使用した表現の延べ語数を示したものであるが、男性34名、女性42名と8名の人数差があったため、使われた語数を人数で割って一人当たりが何回使ったかという平均の値をもとにグラフを作成した。以下、示すデータはすべて、同様の手順で作成したものを挙げる。

図1：「おいしさ」を表す場面で使用された表現（延べ語数、回／人）

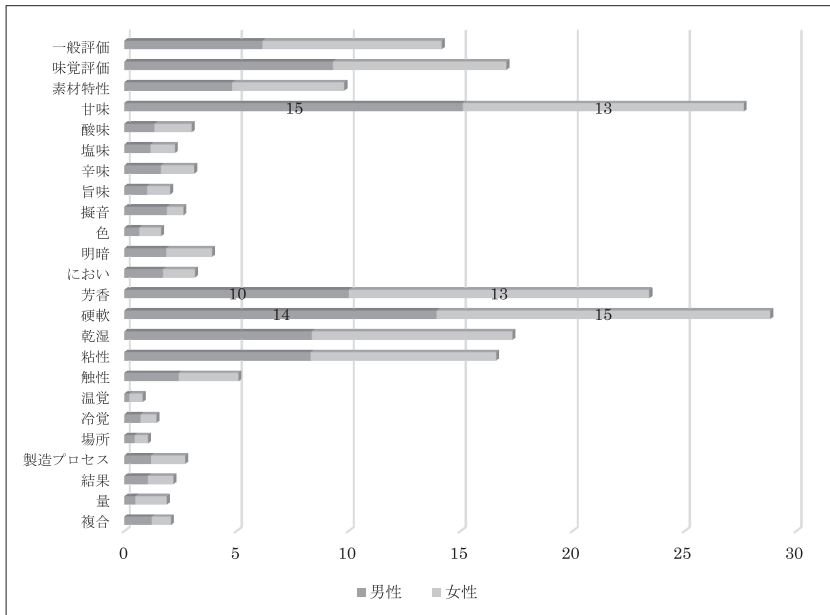


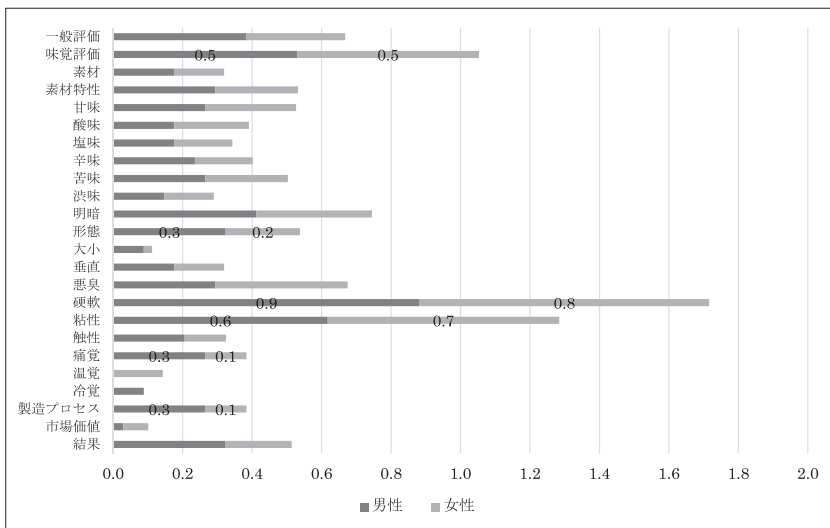
図1が示すように、男女が最も多く使用したのは「硬軟」表現で、次いで「甘味」、「芳香」といった表現が続く。このうち、男女差が見られたのは次の表現であった。

- ・男性>女性：「甘味」表現（一人当たりの平均、男性15回、女性13回）
 - ・女性>男性：「一般評価」表現（女性8回、男性6回）、「芳香」表現（女性13回、男性10回）
- 以上から、「甘味」は男性が、そして「一般評価」

と「芳香」の表現は女性の方がより多く使用する傾向があるという可能性が示唆される。ただしこの差が有意なものであるのかどうか、後に行う本調査では統計処理等を経てさらに結果を精緻なものにする必要がある。

次に異なり数に注目すると、延べ語数と同様、「硬軟」の表現の種類が飛び抜けて多いという結果であった。

図2：「おいしさ」を表す場面で使用された表現（異なり語数、種類／人）



以上をまとめると、「おいしさ」を表す場面における男女の共通点は、今回の調査においては、中国語母語話者は男女とも、おいしさを「硬軟」や「甘味」、「芳香」の表現で多く表現する傾向がみられたということ、そしてこのうち特に「硬軟」の表現に関しては、男女とも目立って表現のパラエティに富

み、様々な表現で硬軟を表すという2点である。この調査で使用された硬軟の表現は、例えば次のようなものであった。

表5：多く使用された中国語の「硬軟」の味表現（使用回数）

	中国語	日本語	男	女	合計
1	有嚼劲	歯ごたえがある	88	113	201
2	软软的	柔らかい	41	63	104
3	筋道	歯ごたえがいい	30	47	77
4	松软	柔らかい	25	34	59
5	口感好	食感がいい	25	29	54
6	Q 弾	弾力がある	25	19	44
7	绵软	柔らかすぎる	13	17	30

一方、男女の相違点は、おいしさを表す際、男性は女性より「甘味」の表現を多く使用する傾向がみられ、その一方で、女性は男性より、「一般評価」と「芳香」の表現を多く使用する傾向が示唆されるという点であった。

最後に、個々の表現に注目してみると、「脆脆的」（さくさく）という表現については、男性が一人当たり平均1.8回使用したのに対し、女性は3.7回と、女性の方がより多くこの硬軟の表現を使用した。

表6：おいしさ表現における男女差（上位3表現、人／回数）

No.	中国語	日本語	男	女	男女差
1	甜	甘い	4.9	1.2	3.7
2	香	いい匂い	4.9	2.7	2.2
3	脆脆的	さくさく	1.8	3.7	1.9

6. 「まずさ」表現に関する男女の比較

次に、まずさを表す場面についてみる。以下に示す表は、男女それぞれに多く使用された上位の10表現である。

表7：男性に多く使用されたまずさ表現（回答数、上位10表現）

No.	カテゴリ	中国語	日本語	回答数
1	甘味	太甜	甘すぎる	70
2	粘性	膩	しつこい	67
3	形態	干巴巴	ぼろぼろ	64
4	辛味	太辣	辛すぎる	51
5	酸味	酸	酸っぱい	46
6	味覚評価	无味	味がない	43
7	粘性	油腻	脂っこい	41
8	味覚評価	不好吃	美味しくない（食べ物）	38
9	悪臭	腥	生くさい（魚の匂い）	36
10	苦味	苦	苦い	36

表8：女性に多く使用された表現まずさ表現（回答数、上位10表現）

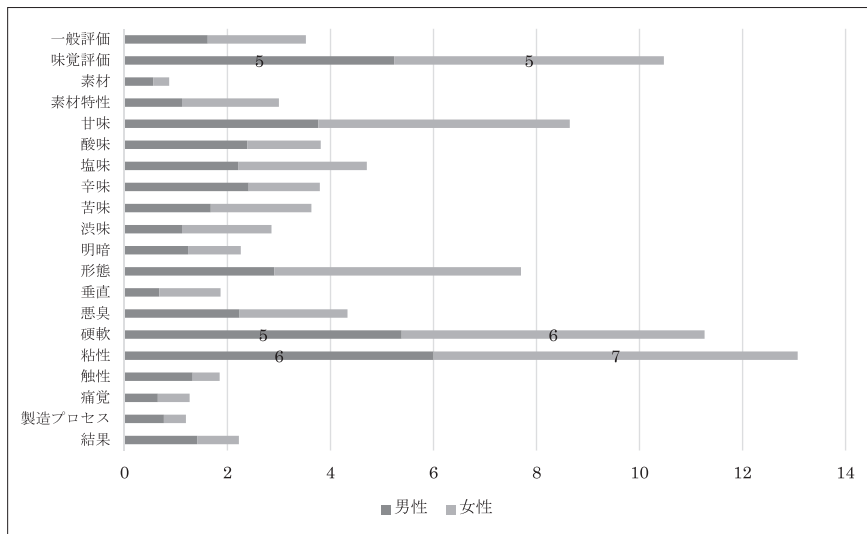
No.	カテゴリ	中国語	日本語	回答数
1	形態	干巴巴	ぼろぼろ	116
2	甘味	甜膩	甘すぎる	92
3	粘性	膩	しつこい	88
4	粘性	油膩	脂っこい	87
5	硬軟	硬硬的	硬い	71
6	甘味	太甜	甘すぎる	64
7	味覚評価	无味	味がない	62
8	素材特性	不新鮮	新鮮ではない	61
9	味覚評価	没味道	味がない	53
10	塩味	咸	しょっぱい	41

男性に最も多く使用された「太甜」（甘すぎる）、そして女性に2番目に多く使用された「甜膩」（甘すぎる）からもわかるように、「甘味」は、おいしさを表す際に多く使用されるが、まずさを表す際にもまた、多く使用される。すなわち、甘さが過ぎるとまずさに転じるのである。同様に、おいしさを表す際に多く使用された「硬軟」の表現もまた、まずさをも表し得る（「硬硬的」（硬い）、「太硬」（硬す

ぎる）など）。硬さも甘さと同様、度が過ぎるとマイナス評価に転じてしまうことがわかる。以上のように、中国語の「甘味」と「硬軟」の表現は、おいしさを表す際だけでなく、まずさを表す際にも男女ともによく使用される。

次に、全体をみていく。まず、それぞれの表現の使用回数を見る。

図3：「まずさ」を表す場面で使用された表現（延べ語数、回／人）



男性と女性がまずさを表す際に使用した表現は、「粘性」、「硬軟」、「味覚評価」の順で、それぞれの使用回数は、男女一人あたり平均13回、11回、10回であった。

次に男女の差をみると、「形態」の表現については、女性が一人平均5回、男性が3回と差がみられることから、まずさを表す際に、女性の方がより多

くの「形態」表現を使用する傾向があるという可能性がある。なお「形態」の味表現とは日本語では次のような表現をいう。

(6)「形態」の味表現：全体的な形の表現：ぼんやりとした、ふくらみのある、明確な、はっきりした、鮮明な（瀬戸2003：48より要約）

中国語母語話者はこの調査で、次のような中国語

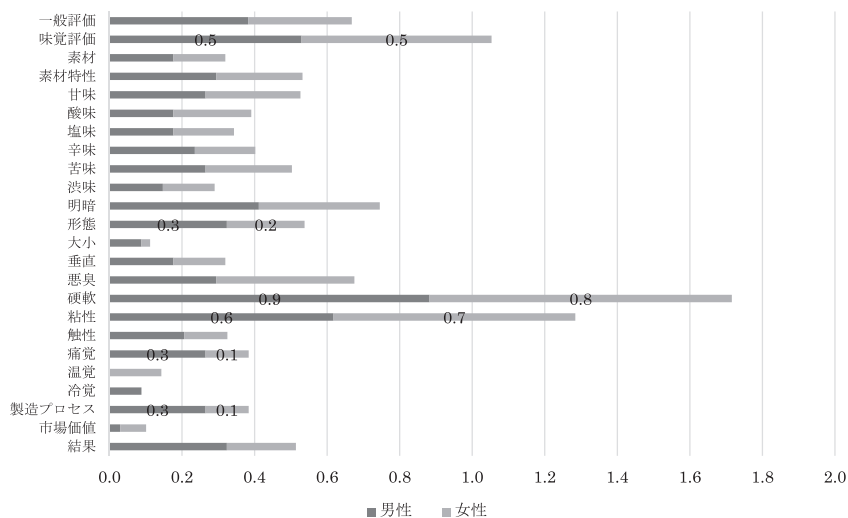
の形態の味表現を使用した。

(7)中国語の「形態」の味表現：「好看」、「外表很精致（商店的）」、「外观靓丽的」、「卖相十足」、「品相佳」、「品相帮」、「造型好看的」、「美观」（すべて、

およそ「見た目が良い」に相当）*颗粒感*、*颗粒感*（*粒に膨らみがある*）

次に、男女それぞれが使用したまずさの表現のパラエティをみる。

図4：「まずさ」を表す場面で使用された表現（異なり語数、種類／人）



おいしさを表す際に多くの種類が使用されたのは、「硬軟」と「粘性」の表現であったが、男女がまずさを表す際もやはり「硬軟」と「粘性」の表現が多く使用された。一方、図4で男女の差があると思われる表現は次のとおりである。

・男>女：「製造プロセス」の表現（男性0.3回、女性0.1回）、「痛覚」の表現（男性0.3回、女性0.1回）
以上から、わずかではあるが、「製造プロセス」と「痛覚」の表現については、男性の方がより様々な表現を使用するという可能性がある。「製造プロセス」の表現とは、日本語では次のような表現である。

(8)「製造プロセス」の味表現：状況表現のひとつ：

手の込んだ、*じっくり発酵させた*、*無添加の*、*手作りの*（瀬戸2003：58より要約）

中国語では次のような「製造プロセス」の味表現が多く使用された。

(9)中国語の「製造プロセス」の味表現：「*微焦*」（*ちょっと焦げている*）、「*做工细腻*」（*繊細な作りかた*）、「*味道很足*」（*味付きがたっぷりの*）、「*味道十足*」（*味付けがしっかりした*）、「*味道适中*」（*味付けがちょうど良い*）など

また、「酸味」を表す表現にも男女差が現れた。

表9：多く使用された味の表現にみられる男女差（まずさ、回／人）

No.	日本語	中国語	男性平均	女性平均	男女の差
1	甘すぎる	甜膩	0.5	2.2	1.7
2	硬い	硬硬的	0.6	1.7	1.1
3	酸っぱい	酸	1.4	0.4	1

すでに述べたように、男女とも「太甜」（甘すぎる）、「膩」（しつこい）、「干巴巴」（ぼろぼろ）で多くまずさを表したが、酸味を表す「酸」については、

今回の調査では男性の方がより頻繁に使用するという傾向がみえた。一方、甘味や硬軟を表す表現の中で、「甜膩」（甘すぎる）や「硬硬的」（硬い）とい

う表現については、女性の方が多く使用した。

V. 結論

以上の考察を以下にまとめる。まず「おいしさ」を表す際の、男女の共通点は次の2点である。おいしさを表す際、使用回数が多いのがともに「硬軟」「甘味」「芳香」の表現であるという点と、さらにこのうち、おいしさの「硬軟」の表現に関しては、男女とも他の表現と比べ、飛び抜けて表現のパラエティに富むという点である。つまり、中国語母語話者は男女とも「硬軟」の表現で頻繁に、かつ様々な表現でもっておいしさを表す傾向がある。次に、おいしさを表す際の相違点は、「甘味」については男性が、そして「一般評価」と「芳香」については女性が、より頻繁においしさを表す可能性があるという点である。以上がおいしさを表す際の男女の共通点と相違点である。

一方、まずさ表現においても男女に共通点がみられ、それは「粘性」と「硬軟」で多くまずさを表す傾向があるという点である。また、甘すぎること油っこいもの、味が無いものに対してもともにまずさを感じやすい。一方、まずさを表す際にみとめられた相違点は、「痛覚」と「製造プロセス」の表現で、これらの表現については、男性の方がより様々な表現を使用するという可能性があるという点であった。

日本語の男女差については、大橋（2015）に詳しい分析があり、女性は「もちもち、とろける」等の「食感系」の表現が使用されやすいという報告がある。さらに武藤・副島（2012）には韓国語話者の食感系表現の使用にみられる男女差について次のような同様の指摘がある。

男女差の検討を行うために、下位分類間の得点についてt検定を行った。「柔性・重弾力系」（中略）、「乾湿系」（中略）、「口内感触・表面弾力系」（中略）、「温覚系」（中略）、「水分系」（中略）、男性よりも女性の方が高得点であり、その差は温覚系以外は有意であった。女性にとってテクスチャーを使用することは男性よりも日常的な行動であり、下位グループ間の使用とはあまり関係なく行われるといえるのではないだろうか。（武藤・副島（2012:26-29）より抜粋）

以上のように、日韓語に関する調査においては、女性がよりテクスチャーに関する語を使用するという

指摘がみられる。本調査の中国語においては、男女ともが硬軟表現を多く使用し、硬軟表現について大きな差が現れなかったが、「芳香」（女>男）や「製造プロセス」（男>女）においては、男女差と思われる差がみられた。ただし、個々の表現に注目してしてみると、「脆脆的」（さくさく）という表現については、男性が一人当たり平均1.8回使用したのに対し、女性は3.7回と女性の方がより多くこの硬軟の表現を使用した。またまずさを表す際の「硬硬的」（硬い）についても、女性の方が多く使用するという傾向がみえた。

今回の調査でみられた、こうした女性による「脆脆的」（さくさく）や「硬硬的」（硬い）の多用は、日韓語で指摘されている女性の食感表現の多用と共通性が認められるが、それは女性に特徴的な言語行動のひとつに位置づけられるのだろうか。またそれは、他の言語においてもみとめられる傾向なのかどうか、今後も調査を続け明らかにする。

むろん、今回のこの事前調査は、調査対象者が大学生に限定されたものであり、人数的にも十分とはいえず、非常に狭い範囲の限定的なデータである。従って、引き続き本調査が必要である。その際、食感の表現の多用等が話者自身に本当に意識されていないものなのかどうかについても、さらに別の調査を実施する等して確認する必要もある。

<謝辞>

本研究はJSPS 科研費 JP16K02636 の助成を受けたものです。

基盤C「味覚語彙における普遍性と相対性に関する研究」、武藤彩加（研究代表者）。

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Numbers JP16K02636. (Grant-in-Aid for Scientific Research C)

また本稿は以下の研究発表をもとに加筆・修正をしたものです。

武藤彩加（2016）「味を表す表現使用にみられる男女差－中国語母語話者を対象とした調査から－」, 日本語教育国際大会 Bali ICJLE2016（9月9日）, 於インドネシア・バリヌサドゥアコンベンションセンター。

参考文献

- 阿部ひで子ノース (2014) 「ゲイ／オネェ／ニューハーフのことはー男性語と女性語のあいだ」, 『日本語学』 33-1, 明治書院, 44-59.
- 石毛直道 (1983) 「味覚表現語の分析」, 『言語生活』 382, 筑摩書, 14-24.
- 石間紀男 (1995) 「食品に対する評価の基礎要因」, 『食の文化フォーラム 食のことは』, ドメス出版, 113-128.
- 泉子K・メイナード (2001) 『恋するふたりの感情ことはードラマ表現の分析と日本語論ー』, くろしお出版.
- 上野田鶴子 (1972) 「終助詞とその周辺」, 『日本語教育』 17, 日本語教育学会, 62-77.
- 大橋正房 (2015) 『シズルワードの現在「おいしいを感じる言葉」調査報告』, 株式会社B・M・FT出版部.
- 大橋正房他編著 (2010) 『「おいしい」感覚と言葉 食感の世代』, 株式会社B/M/FT出版部.
- 小川小百合 (2001) 「話し言葉の男女差ー定義・意識・実際ー」, 『日本語とジェンダー』 4, 日本語ジェンダー学会, 26-39.
- 沖裕子 (1999) 「気がつきにくい方言」, 『日本語学臨時増刊号 地域方言と社会方言』, 明治書院, 156-165.
- 郭旻恵 (2005) 「味覚における共感覚表現: 日本語, 韓国語の両言語の比較」, 『言語文化と日本語教育』 30, お茶の水女子大学日本言語文化学会, 122-125.
- 河崎みゆき (2011) 「中国の若い女性のことはを探るー中国男女口癖調査を中心に」, 『日本語とジェンダー』 11, 日本ジェンダー学会, (ウェブによる公開).
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』, 岩波書店.
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞ー用法と実例ー』, 秀英出版.
- 小林美恵子 (1993) 「世代と女性語ー若い世代のことはの「中性化」について」, 『日本語学』 12-6, 181-192.
- 寿岳章子 (1979) 『日本語と女』, 岩波書店.
- 杉本つとむ (1975) 『女のことは誌』, 雄山閣出版.
- 瀬戸賢一 (2003) 『ことはは味を超える 美味しい表現の探究』, 海鳴社.
- 曹大峰 (2008) 「中国語の「呼称」表現とジェンダーー中日対照の視点からー」, 『日本語とジェンダー』 8, 日本語ジェンダー学会, (ウェブによる公開).
- 副島健作・武藤彩加 (2013) 「日本語学習者による『テキストチャー (食感) 表現』の使用」, 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』 8, 東北大学高等教育開発推進センター, 27-38.
- 副島健作・武藤彩加 (2013) 「日本語学習者による『テキストチャー (食感) 表現』の使用」, 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』 8, 東北大学高等教育開発推進センター, 27-38.
- 田中章夫 (1973) 「終助詞と間投助詞」, 『品詞別日本文法講座9 助詞』, 明治書院.
- トムソン木下千尋・尾辻恵美 (2009) 「ビジネス日本語教科書とジェンダーの多面的考察」, 『世界の日本語教育日本語教育論集』 19, 49-67.
- 任 利 (2008) 「現代中国語の漢字に潜むジェンダー」, 『ことは』 29, 現代日本語研究会, 83-91.
- 任 利 (2015) 「現代中国語辞書に潜む性差別ー第三人称代名詞“他”“她”の例文分析からー」, 『言語と文化』 27, 文教大学, 135-153.
- 前山加奈子 (2004) 「中国語の女性三人称にみるフェミニズム／ジェンダー」, 『駿河台大学論叢』 28, 駿河台大学, 144-148.
- 松本伸子 (1983) 「美味しさの科学」, 『言語生活』 382, 筑摩書房, 58-64.
- 水本光美, 福盛壽賀子, 高田恭子 (2009) 「日本語教材にみる女性文末詞ー実社会における使用実態調査との比較分析ー」, 日本語とジェンダー9, 日本語ジェンダー学会, 11-26.
- 早川文代 (2006) 「テキストチャー (食感) を表す多彩な日本語」, 『豆類時報』 52, 日本豆類基金協会, 42-46.
- 早川文代他 (2004) 「中国語テキストチャー表現の収集と分類」, 『日本食品科学工学会誌』 51, 日本食品科学工学会, 131-140.
- 早川文代他 (2005) 「日本語テキストチャー用語の収集」, 『食品科学工学会誌』 52, 食品化学会, 337-346.
- 林玉恵 (2006) 「日中語彙にみる性差別語」, 『台湾日本語文學報』 21, 台湾日本語文学会, 291-316.
- 堀井令以知 (1990), 『女の言葉』, 明治書院.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法ー改訂版ー』, くろしお出版.
- 武藤彩加 (2015) 『日本語の共感覚的比喩』, ひつじ書房.
- 武藤彩加・副島健作 (2012) 「テキストチャー (食感) 表現使用にみられる男女差について」, 言語文化学会第26回大会 (2012年12月8日) ハンドアウト, 於阪南大学.
- 山田敏弘 (2001) 「とよまの気づかれにくい方言」, 『人文社会学部紀要』, 富山国際大学.
- 山梨正明 (1988) 『比喩と理解』 (認知科学選書17), 東

京大学出版会.

Berlin,B.& Kay,P. (1969). *Basic color terms: Their universality and evolution*. Berkeley: University of California Press.

Makino Seiichi & Tsutsui Michio (1986) *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*, The Japan Times

Whorf, B. L. (1956). *Language, thought, and reality: Selected writings of Benjamin Lee Whorf*, Cambridge, MA: MIT Press.

陳原 (1980)『言語与社会生活』, 三聯書店.

陳松岑 (1985)『社会語言学導論』, 北京大学出版社.

楊春 (2010)『性別語言研究』, 光明日報出版社.